

## <資料>

# 市場経済と計画経済（3）

中村平八

### [解題]

#### 計画経済と指令経済

先にわれわれは、日本の経済学者が定式化した市場経済範疇および計画経済範疇について紹介した。ところがこの解題の后者に関連して、読者から計画経済と指令経済の相違について説明を求められた。従来、ソ連など旧社会主義国の理論家、またマルクス経済学系統の理論家は、さまざまな留保をつけつつも、ソ連などをマルクスの社会主義国と認定し、この社会主義国の経済は計画経済である、と主張してきた。他方西側の経済学者、とくに新古典派の経済学者は、ソ連経済関係の論稿において、計画経済 *planned economy* という概念の使用を避け、指令経済 *command economy* という用語を使用する例が多かった。

読者の提起したこの問題は検討に値する。計画経済と指令経済は同義であろうか。ちなみに日本の代表的な経済学辞典は、「指令経済」という用語を承認しておらず、また「計画経済」の用語解説において、「指令経済」との関係について論述しているものはない。しかし、日本の研究者の個別論稿においては、ソ連等の計画経済に言及したさい、「指令的」とか「行政的」という形容詞をつける場合がある。

外国の場合はどうであろうか。力不足のため広く経済学辞典類を探索できなかったが、代表的な文献として <The New Encyclopædia Britannica, 15th Ed., 1993.> をとりあげてみた。同百科辞典には、*planned economy* という項目はなく、代わりに *command economy* という項目が掲載されている (Vol.3,

486 ページ)。

同辞典によれば、指令経済とは、「生産手段が社会的 (publicly) に所有され、経済活動が中央当局 (a central authority) によって制御される (controlled) 経済システム」のことである。中央当局は、「生産企業に量的生産目標を割り当て、原材料を配分する」。指令経済システムにおける生産物全体の釣り合いは、中央当局により政治的に決定される。釣り合いの決定後、中央計画者 (central planners) は、「生産すべき財貨の類別および各企業への割当量を算定する」。消費者は中央計画者の決定に間接的に影響を与えることができるが、それは計画者が市場で発生する過剰および不足を考慮する場合に限られる。消費者の唯一の直接的選択は、すでに生産された商品に対してなされる。「価格もまた中央計画者によって決められるが、価格は、市場経済のごとく、財貨の生産者が生産量を増加もしくは減少させるシグナルの役割は果たさない」。その代わりに価格は、中央計画者が消費財の総需要と供給とを調和させようと努力するさいに、主に彼らの計器として用いられる。中央当局は、企業に「物的単位で生産目標を割り当て、物量で原材料を配分する」。数千万もの生産物をともなう現代の巨大経済の過程はきわめて複雑であり、実際には多くの困難がともなう。「この種の中央計画にも利点がないわけではない。必要とあらば、戦時とか国家の危急のさいに、資源を全国的規模でただちに動員できるからである」。

同辞典は Economic Systems という大項目を設け (Vol.17, pp.908-913)、中項目として Centrally planned systems (pp.912-913)、小項目として Soviet planning を設けている (pp.912-913)。それらによれば、「現代指令社会は、事実上、社会主義の名で組織されてきた」と述べ、指令経済は、現実に存在したソ連・東欧・中国などの「社会主義経済」、すなわち「計画経済」の同義語であることを示している。参考までに同辞典は、経済システムとして、①tradition の原理にもとづく経済システム、②command にしたがって組織される経済システム、③中心的組織形態が market である経済システムの三形態をあげている (pp.908-910)。

中心的組織形態という点に着目すれば、歴史的に見て人類の経済システム

は、①tradition system (伝統システム) →②command system (指令システム) →③market system (市場システム) という三形態を経験してきたことになる。同辞典は、伝統システムの事例として、カラハリ、エスキモー、ベドウィンの生活をあげ、原始経済システム、つまり traditional mode of existence (伝統的生存様式) の下での経済システムは、採集・狩猟活動の調整様式も、分配手続ももたないので、economics (経済学) の特別の用語や概念装置は必要としない、と述べている。

指令システムとは、公然もしくは隠然たる権力——物理的な強制もしくは刑罰を行使する権力、あるいは富もしくは特権を授与する権力——を使用するシステムである。指令システムは、資源および労働を動員する能力をそなえており、たとえば中国の万里の長城とかエジプトのピラミッドのような大規模な建造物の建設が可能となる。指令システムの登場は、歴史的に見て王国とか帝国などという centralized states 中央集権国家の出現と結びついている。いわゆる古代・中世の経済は、指令システムが支配的な経済であり、市場と商品交換は従属的存在であった。

現代の指令社会は、社会主義という名のもとに事実上組織されており、指令が社会主義の主な調整システムであり、生産諸力は、主に支配エリートの消費あるいは権力・名誉を充足するために用いられる。指令システムは、伝統システムと同様に、経済学とよばれる特殊な社会的分析を必要としない。

市場システムとは、市場メカニズムが energizer 活動奨励者および coordinator 調整者の役割をはたすシステムである。市場システムが中心的役割をはたす社会は、ただ一つ、資本主義社会だけである。以上が <The New Encyclopaedia Britannica> からの簡単な紹介である。なお市場システムの標準的説明については、わが解題論文の「市場経済」の項目を参照されたい。

さて現代中国の理論家は、「計画経済」と「指令経済」の関係をどう考えているのだろうか。彼らは、旧ソ連や改革・開放以前の中国の経済制度をどのように性格規定しているのだろうか。ある学者は「行政的命令方式の計画管理制度(原文、行政命令式計画管理体制)」、「高度に集中的な指令性計画管理制度(高度集

中的指令性計画管理体制)」、「行政的指令性の計画管理制度(行政指令性計画管理体制)」、「行政的指令を主とする計画管理制度(以行政指令為主的計劃管理体制)」(薛暮橋「社会主義的市場經濟の諸問題」『著名学者の社会主義的市場經濟論』人民出版社, 1992年)と理解している。ある学者は「中央計画經濟(中央計劃經濟)」、「指令的計画經濟(指令的計劃經濟)」と規定している(林子力「現代市場經濟と現代社会主義」, 同上)。林論文の原文の「指令的計画經濟」は、「指令の計画經濟」と読むこともできるが、本稿における訳語では「指令的」を形容詞とし、「指令的(な)計画經濟」と訳した。

また次の機会に紹介するであろう董輔初論文は、改革・開放以前の中国のシステムを「指令性計画經濟(指令性計劃經濟)」と理解している(「市場と社会主義的市場」, 同上)。これは「指令的性格の計画經濟」の意味であろう。論理的には、「指令性計画管理制度」、「指令的計画經濟」あるいは「指令性計画經濟」という概念は、それ以外の「計画經濟」の存在を指定しているかのようであるが、歴史的、實際的には、そのような「計画經濟」は存在しなかったのである。以上の論文はすべて、すでに柳沢和也との共同の作業で邦訳済みか、邦訳予定であるので、日本の經濟原論の学者の批判的検討を期待している。

旧ソ連などの社会主義国では、ゴスプランなど中央の計画機関がまず國民經濟計画を策定し、ついでそれは共産党および最高會議によって審議・採択され、法律となり、国家によって下級機関に下達[指令]された。下達[指令]された計画の実行・実現は、関係諸機関・企業にとって義務となる。その意味で、指令にもとづく資源配分および計画の実施は、行政的な資源配分および計画の実施と言い換えてもよい。この点は、現代資本主義国の政府が策定するガイドラインとしての經濟計画と質的に異なる。一般に指令とは、上級機関が下級機関に対して行う指図のことである。旧社会主義国における「計画」の遂行は、「指令」にもとづいて行われた。その意味で、中国の学者が「指令的計画經濟」あるいは「指令性計画經濟」と表現したことは、理解できる。したがって、「計画經濟」と「指令經濟」は、同一のものの別名ということになり、強調点が異なる同義語だと解釈しても誤りでないように思われる。

さて中国の研究者自身の筆による社会主義的市場経済論の紹介も、第3回目となった。そこで、これまでに紹介した論文を記しておこう。薛暮橋「社会主義的市場経済の諸問題」、馬洪「社会主義的市場経済を発展させ、計画と市場とが結合する新制度を完全なものにしよう」、龚育之「市場経済の問題と思想路線の問題」(以上、神奈川大学経済学会『商経論叢』第32巻第4号、1997年5月)、呉敬琏「社会主義的市場経済の歴史的沿革と現実的意義」、劉国光「計画と市場に関する若干の問題」(以上、第33巻第1号、1997年7月)。なお、解題は中村が、翻訳は柳沢和也と中村が共同で行った。